APO Letter

2024
Vol.87
March

〈巻頭インタビュー〉

認知症高齢者の在宅医療と薬局の役割

医療法人社団至高会 たかせクリニック 理事長
髙瀬義昌 先生

SOGO PHARMACY GROUP

APO Letter
vol.87

CONTENTS

● Expert Interview 1
認知症高齢者の在宅医療と薬局の役割

みま～も主催イベント 7
「楽しみながら元気に健康！いきいきフェスタ2023」に出展しました

● 健康サポート薬局 Report 9
飛び出せ！健康サポート薬局

そうごう薬局 水戸店 11
専門医療機関連携薬局認定

小児がん治療支援チャリティーライヴ 12
「LIVE EMPOWER CHILDREN 2024」に協賛しました

2023年 学会発表演題紹介 13

総合メディカルの人財育成 14

認知症高齢者の在宅医療と薬局の役割

Expert Interview

高瀬 義昌 先生

医療法人社団至高会 たかせクリニック 理事長

プロフィール

1984年、信州大学医学部卒業。東京医科大学大学院修了、医学博士。麻酔科、小児科研修を経て、包括的医療・日本風の家庭医学・家族療法を模索し、2004年、東京都大田区に在宅医療中心の「たかせクリニック」を開業する。在宅医療における認知症のスペシャリストとして厚生労働省推奨事業や東京都・大田区の地域包括ケア、介護関連事業の委員も数多く務め、在宅医療の発展に日々邁進している。「はじめての認知症介護」「自宅で安らかな最期を迎える方法」など著書多数。

日本における認知症高齢者の数は2025年には約700万人に達することが見込まれており、高齢者の約5人に1人が認知症となります[1)]。厚生労働省では、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指し、「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」（新オレンジプラン）を策定していますが、認知症治療においては介護する家族のケアや多職種での連携、地域の協力が欠かせません。東京都大田区で高齢者に特化した在宅専門のクリニックを開業されている認知症治療のスペシャリストである髙瀬義昌先生に、認知症高齢者の在宅医療と薬局の役割について、お話をお伺いしました。

1)厚生労働省 認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（概要）

［インタビュアー］

菊池 大介
Daisuke Kikuchi
総合メディカル株式会社
薬局運営本部
東京薬局運営部
運営部長

今井 英詞
Eiji Imai
みよの台薬局株式会社
第3運営部
兼 在宅事業本部 部長

髙木 和江
Kazue Takagi
みよの台薬局株式会社
在宅事業本部
本部長

在宅診療で「家族」にアプローチ

菊池　今年は先生がクリニックを開業されて20年になります。今から20年も前に在宅医療に特化したクリニックを開業された理由や、そもそも先生が在宅医療に興味を持たれた経緯などを改めてお話ししていただけますか。

髙瀬　私の祖父は産婦人科の医師で、もちろん患者さんは女性に限られます。その様子を間近で見ていたので、今から考えるとそれに対する反動もあったのかもしれませんが、自分はもう少し広い範囲で人の役に立つ仕事をしたいと、子供のころから考えていたように思います。中学校の先輩で作家で医師の北杜夫さんに憧れていたので、大学は彼が学生時代を過ごした松本か出身校である仙台の医学部を目指しており、信州大学に進みました。長野県は佐久総合病院や諏訪中央病院などがあり、当時から地域医療に関する取り組みがとても進んでいたところです。当時、信州大学医学部精神医学教室に在籍されており、後に東大の教授になられた原田憲一先生から精神科を勧められたこともあり、また北杜夫さんの影響で元々精神科に興味を持っていたこともあったため、精神科医を目指すこととなりました。その後さまざまな経緯があって麻酔科医の道に進んだのですが、麻酔科医として勤務をしていた時に身体を壊してしまい、「本来自分がしたいことは何だったのか。」という原点に立ち返りました。メンタルヘルスにも興味があったので、千葉でクリニックを開業された伊藤真美先生（花の谷クリニック）に、末期医療、家族療法、交流分析※1などについて、教えていただきました。**家族療法とは、患者さんご本人とともに、家族の方たちの相談にも乗りながら、家族ぐるみでアプローチをすることで、症状や問題行動の解決を図ろうという方法です。**その後、杉並区の病院で小児科医として勤務しましたが、小児科では患者さんの全身を診ることが求められます。その全身を診るということが、ものすごく大切だと感じました。

そのうちに自分でクリニックを運営したいと考えるようになりましたが、外来診療だとどうしても一人の患者さんにかける時間は限られてしまいます。**その点、在宅診療であれば患者さんに十分に時間をかけることができ、また私が勉強してきた家族療法や交流分析などの心理学的な手法も応用できると考えたことから、在宅クリニックを開業することにしました。**

菊池　開業の場所として大田区を選ばれたのはどのような理由だったのでしょうか。

髙瀬　知り合いの医師が多くいたことと、当時はまだ大田区で在宅診療を行っているクリニックが少なかったことがあります。開業してから20年の間に在宅診療のニーズは年々高まってきており、現在では施設と個人宅を合わせて、約720件を担当しています。

※1　交流分析:自分自身の人間関係やコミュニケーションの傾向を知り、対人関係の問題を解消したり、トラブルを回避したりするための心理療法

在宅での課題と、ネットワーク・オンライン診療の可能性

菊池　大田区では澤登久雄先生が発起人となって、「おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）※2」の活動が活発に行われています。たかせクリニックも「みま～も」に協賛されていらっしゃいますね。

髙瀬　高齢者を家族のみならず、地域全体で見守っていくという活動はこれからますます重要になります。そういった意味で澤登先生は、志を同じくする仲間として応援しています。あと認知症支援活動として、NPO法人オレンジアクトを立ち上げました。認知症の人の介護をするまだ手前にある、20代から40代ぐらいの若い世代の人に対して、まずは認知症のことを知ってもらうことを目的としています。具体的な活動としては、講演会やワークショップを盛り込んだイベントを開催していますが、認知症サポーターの養成なども積極的に行っています。若い人たちに認知症のことを知ってもらうことで、身近な問題として自分の親の将来を考えるようになり、近所のサークルへの加入やボランティア活動への参加を親に勧める。そうすることで、高齢者の地域や社会への参加につながるのではないかと考えています。高齢者も家族や地域と全く関わりを持たずに生活している訳ではありません。**家族療法の基本となるのは、患者さんを家族や地域の集合体の中の存在と捉えて、集合体全体から問題を解決していこうという、「システムズ・アプローチ」という考え方ですが、家族の中に入り込むことが可能な在宅医療だからこそ、このようなアプローチが可能となります。**

菊池　子供の世代がもう少し高齢になってくると、世帯によっては、80代の親が50代の子どもの生活を支えるという、いわゆる8050問題なども出てきますね。

髙瀬　はい、発達障害などが原因で中年の子供が引きこもりになり、親世代に過大な負担がかかってしまうという問題のほかにも、認知症の子供が認知症の親を介護するという、「認認介護」の問題も出てきます。この「認認介護」という言葉はおそらく私が最初に活字にして、その後多くのメディアで取り上げられました。**この8050問題や認認介護といった事例は在宅における今後の大きな課題です。**少しでもそういった家族の方々の助けになればと、たかせクリニックでは高齢者のメンタル外来も始めましたが、どうしても受け入れることができる数には限りがあります。私は現在、東京都医師会の認知症サポート医連絡協議会の副委員長を拝命していますが、医師のネットワークを活用して、そういった課題を解決できる可能性はあると思っています。例えば黒木春郎先生（こどもとおとなのクリニック パウルーム（東京都港区））は小児科で早くからオンライン診療を導入してきた先生で、発達障害を漢方薬でうまくコントロールされています。日本中どこからでもアクセスできますので、困ったときはそちらに頼んで助けてもらっています。**このようにオンライン診療を活用して、他の医療機関と連携するという動きは今後、活発になるのではないでしょうか。**私は今ITヘルスケア学会の副代表も務めていますが、総合メディカルさんのように医療DXにも積極的に取り組んでいる会社と一緒に動くと、今後、医薬連携の中から新しいソリューションモデルが考えられるようになると思います。

※2 おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）：地域の医療関係者のみならず、地域住民、商店、企業などが主体的に参画して高齢者を見守り、支援するネットワーク。「みま～も」発起人である澤登久雄先生のインタビュー記事は、APO Letter 82号をご覧ください。

高齢者の薬物治療と薬剤師の役割

今井　先生は高齢者のポリファーマシーに関する著書も多く執筆されています。高齢者の薬物治療については、どのような取り組みをされているのでしょうか。

髙瀬　2015年に日本老年医学会から、患者さんのQOLを維持しながら薬をもっと最適化することを目的として、「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015」が公表されました。これは東大の秋下雅弘先生が中心となってまとめられたものですが※3、この中の「特に慎重な投与を要する薬物のリスト」「開始を考慮するべき薬物のリスト」の作成については私もお手伝いさせていただきました。特に個人宅にお伺いすると薬が散乱していたり、この人に飲んでもらわなくてもいいのではと思える薬があったりするので、高齢者のポリファーマシーや不要と思える薬の投与については以前から問題意識を持っていました。東大の入院患者2,412名を対象とした解析では、6剤以上の薬剤を服用している患者さんでは、1～3剤の患者さんと比べて薬物有害事象の頻度が有意に上昇しています[1]。また、診療所通院患者165名の解析では、5剤以上の服用で4剤以下の方と比べて転倒のリスクが有意に上昇しています[2]。たかせクリニックでも処方薬を削減して、QOLやADLがどのように変化するかを調査したことがあります。3名の患者さんで薬剤の種類をそれぞれ、17種類から6種類、13種類から7種類、17種類から7種類へと削減しましたが、QOLやADLに大きな違いは認められませんでした[3]。**ただし、単純に薬剤の量を減らせばいい訳ではなく、患者さん個々の病態や生活環境、意思などを考慮して優先順位をつける必要があります。大切なことは減薬の後にもう一度検査をして、問題が生じていないかを確認することです。**

今井　患者さんの服薬状況や体調については薬局でも電話によるフォローアップなども積極的に行っていますので、減薬に関する取り組みについてはお手伝いできることが大いにありそうですね。あと認知症の薬物治療に関する考え方も聞かせていただけますか。

髙瀬　高齢者に多い精神・神経疾患は認知症（dementia）、うつ病（depression）、せん妄（delirium）で、その頭文字をとって「3D」と呼ばれます。自宅で面倒がみれなくなって施設に移る患者さんでは、この3Dを併発していることも多く、その際に特に問題になるのは暴言や暴力、徘徊などのいわゆるBPSD※4と呼ばれる症状です。こうした患者さんにおいては、疾患を鑑別するよりも先に症状をコントロールすることが優先されますので、私は経験的に抗うつ薬をまず使用し、症状が治まらないときにアリピプラゾールを追加していました。2022年に日本うつ病学会が「高齢者のうつ病治療ガイドライン」を改訂していますが、そこでもアリピプラゾールの増強療法が有効であったというRCTが引用されています[4]。また現在では認知症治療薬の用量未満での投与も実質的に可能となりましたが、私は以前から患者さんの状態を見て、細かく投与量を調整していました。**もちろん薬を変えたり用量を変更したりした際には、患者さんの状態を細かくチェックすることが必要です。**私は薬を変えたときには2日おきに電話をかけています。

髙木　先生のご対応は、やはりすごいと思いますし、実際に患者さんが劇的に良くなっているのを何度も目撃しています。

髙瀬　ポリファーマシーの対策にしても、3Dサポートにしても薬局・薬剤師との協力が不可欠です。**薬剤師が入ることで、フォローアップもよりきめ細かくなると思いますし、外来の患者さんであれば、状態の変化にいち早く気づくことができるのも薬局です。**また施設においては、患者さんと医師との間を取り持つメディエーター（仲介者）の役割を現在は看護師さんが担っていると思うのですが、**薬学的な知識を持つ薬剤師がメディエーターとして介在することで、理想的な連携体制が作れると思います。**

薬剤師の方々は本当に能力をいっぱい持っているのに、その潜在能力に気がついていないことが多いのではないでしょうか。患者さん宅や施設で、その能力をフルに発揮していただきたいと思います。

菊池　本日はお忙しい中、多岐にわたり有用なお話をいただき、ありがとうございます。今後も先生と一緒に、より良い在宅診療の実現に向けて努力してまいりたいと思います。

（本インタビューは2024年1月に実施されました）

参考文献

1) T Kojima et al., Geriatr Gerontol Int. 2012 Oct;12(4):761-2.
2) T Kojima et al., Geriatr Gerontol Int. 2012 Jul;12(3):425-30.
3) 老年精神医学雑誌25：1388-1393, 2014「地域包括ケアにおける医薬品適正使用に関する研究-高齢者において処方薬の削減によりQOLが上昇した事例」髙瀬義昌・笹田美和・榊原幹夫・五十嵐中・亀井浩行・小山恵子
4) S Mohamed et al., JAMA. 2017 Jul 11; 318(2): 132–145.

※3 秋下雅弘先生のインタビュー記事については、APO Letter 74号をご覧ください
※4 BPSD：Behavioral and psychological symptoms of dementiaの略。認知症に伴う行動・心理症状

たかせクリニックや地域と連携した、患者さんとご家族に寄り添った活動について

みよの台薬局 品川二葉店 管理薬剤師 押切康子

当薬局は外来の処方箋を1日30枚程度応需するほか、個人在宅を100名、施設を6施設担当しています。その中で、たかせクリニックからは、月に約250枚の処方箋を応需し、認知症関連のものも多くあります。髙瀬先生は患者さんの状態に合わせて細かく用量を調整されます。薬剤師としても都度先生と相談し、処方意図をくみ取ったうえで、処方提案などを行っています。また先生もフォローアップしていただいていますが、例えばせん妄の患者さんではお薬が定常状態に達するまでに4日から1週間程度かかるので、薬局もこのタイミングでフォローアップして状況を確認しています。

認知症患者さんの在宅診療においては、ご家族の不安やご負担を減らすことが重要です。その一環として、品川二葉店では患者さんに合わせて1週間単位のお薬カレンダーを作るなどしていますが、これによりアドヒアランスが向上し、ご家族や医師の方からもとても喜ばれています。また髙瀬先生はポリファーマシーにも精力的に取り組まれており、薬局でもこれまで施設の看護師さんに検査値をお聞きするなどして、積極的に医師に処方提案を行ってきました。

現在、品川区の地域ケア会議に参加するなど地域で患者さんとご家族をサポートする活動を継続しています。これからもクリニックと連携して、困っている患者さんとご家族に寄り添った活動を続けて参ります。

みま〜も主催イベント「楽しみながら元気に健康！いきいきフェスタ2023」に出展しました

健康イベントを開催することで大田区の地域住民の健康増進につながってほしいとの思いから、今回のイベントに出展いたしました。当日は機器を使った測定、健康相談のほか、総合メディカルの公式アプリ「タヨリス」やAIを使用した事前問診サービス「ユビーAI診断」を紹介し、DXも体験していただきました。

2023年12月2日(土)13:00〜16:00
場　　所　プラザ・アペア（東京都大田区西蒲田8-3-5）
主　　催　おおた高齢者見守りネットワーク（みま〜も）
共　　催　清心内海塾・東京羽田ヴィッキーズ
参加薬局　そうごう薬局 マチノマ大森店、西蒲田店、蒲田駅西口店、大森北店、赤坂インターシティAIR店

おおた高齢者見守りネットワーク（みま〜も）で周知するとともに大田区でチラシを配布し、当日は約100名の方に参加いただきました

おおた高齢者見守りネットワーク（みま〜も）とは

高齢者が住み慣れた街で安心して暮らすことができるように地域の医療関係者のみならず、地域住民、商店、企業などが主体的に参画して高齢者を見守り、支援するネットワーク。2008年に東京都大田区で発足。
https://mima-mo.net/
※「みま〜も」の発起人である澤登久雄先生の取材記事はAPO Letter 82号をご覧ください。

スタンプラリーも実施し、健康測定機器2種と健康相談会に加え、ユビー体験とタヨリスダウンロード（かかりつけ薬局登録まで）まで実施いただいた来場者に景品をお渡ししました。

DX体験エリア

電子お薬手帳及び、ユビー体験ができるブース

ユビーAI問診：Ubie株式会社が提供するAIを使用した事前問診サービス

タヨリス：総合メディカルの公式アプリ。「お薬手帳機能」や「オンライン服薬指導機能」などを搭載

ユビー体験
iPadでユビーAI問診の体験

タヨリスDL&体験会
処方箋送付、血圧測定、オンライン服薬指導等

健康相談エリア

機器を用いて、健康状態を分析し薬剤師と健康相談できるブース

AGEs（最終糖化産物）測定

薬剤師との健康相談会

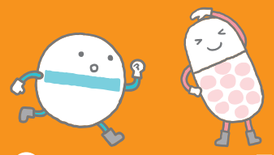
体組成測定

脳年齢測定

そうごう薬局
マチノマ大森店 薬局長
武内 大晃

私は2022年4月にそうごう薬局 マチノマ大森店に赴任しました。
マチノマ大森の中に医療モールがあり、小児科や耳鼻科なども入居していますので、子どもの患者さんが多いのが特徴です。これまでも薬局の中でポリファーマシーの相談会を開催したり施設のイベントスペースで「減塩レシピ試食会」を開催するなど※、イベントは実施していたのですが、患者さんの家族ともつながりを持ちたい、薬局の外にも活動を広げたいという想いがあり、昨年から「みま〜も」に協賛しています。協賛することで、他の専門職の方々ともつながりを持つことができました。今回は「みま〜も」が主催する健康イベントに参加し、機器を用いた測定や健康相談、タヨリスやユビーAI問診の体験をしていただきました。来場された方々にはとても好評でしたが、予定よりも来場者が少なく、イベントの告知と集客が今後の課題だと考えています。
地域包括支援センターともつながりができてきましたので、今後は「みま〜も」での活動とともに、マチノマ大森を有効活用した取り組みも展開してまいります。
※「減塩レシピ試食会」の様子はAPO Letter 77号 7ページをご覧ください

飛び出せ! 健康サポート薬局



そうごう薬局グループの
健康サポート薬局
210店舗
738店舗中
(2024年3月1日現在)

健康サポート薬局の取り組みも薬局内に限らず、地域のイベントに出展するなど薬局外での活動の機会が増えてきました。ここではそのような取り組みの事例をご紹介します。

※健康サポート薬局:かかりつけ薬剤師・薬局の機能に加えて、健康サポート機能として、市販薬や健康食品に関することはもちろん、介護や食事・栄養摂取に関することまで気軽に相談できる薬局

専修大学熊本玉名高等学校
「第22回 WAKU! わく! 広場 ふれあいフェスティバル」に出展

熊本県

玉名高校卒業生の RCS※が起案し、卒業後も交流があった校長先生との縁を通じてイベントへの出展につながりました。

※RCS(ラウンドケアスタッフ):保険請求業務のみならず待合室における患者サービス全般を主として担当するスタッフ

2023年11月5日(日)9:50〜14:00

主催・会場 専修大学熊本玉名高校

参加薬局 そうごう薬局
高瀬店、有明長洲店、菊池店、立願寺店、玉名店

<出展内容>

測定機器:脳年齢、骨健康度測定、血管年齢、血圧
ブースに立ち寄っていただいた方には、
有機茶などPB商品のプレゼント。
その際、そうごう薬局の地図とプレゼント引換券をお渡しし、
来局を促しました。

タヨリスの紹介
その場で登録していただいた方にはPB商品をプレゼント

各出展ブースには学生の担当者も同席。
手作りの案内を作っていただくなど、協力していただきました。

宮崎市男女共同参画センター
「人生100年時代 シニアとその家族のために! 終活フェア」に出展

宮崎県

宮崎市が初の取り組みとして、終活フェアを開催。主催の男女共同参画センターとは昨年よりつながりがあったため、出展を打診されました。

2023年10月21日(土)10:00〜16:00

主催・会場 宮崎市男女共同参画センター

参加薬局 そうごう薬局
池内店、村角店、大塚店、恒久店、大坪店、日向店、亀崎店

<出展内容>

測定機器:骨健康度測定、血管年齢、体組成計、血圧

服薬相談会
ブースに立ち寄っていただいた方には、
有機茶などPB商品をプレゼント。
薬と健康の週間の小冊子、タヨリス、
N-NOSEのチラシ、希望者には血圧管理手帳をお渡ししました。

相談コーナーには遠慮がちに入られる方も、ゆっくりお話をうかがうと、健康面のご不安や薬に対する疑問など多くのことをご相談いただきました。日ごろ医療従事者に聞きたくても聞けないこと、メディアからの多くの情報で不安に感じることが多くあるのだと気付かされました。

そうごう薬局 水戸店
専門医療機関連携薬局認定

2023年3月、そうごう薬局 水戸店が総合メディカルグループで4件目となる専門医療機関連携薬局となりました。管理薬剤師の大塚将悟さんとBPACC※を取得した木村萌美さんに今後の抱負などをお聞きしました。

※BPACC：外来がん治療専門薬剤師（日本臨床腫瘍薬学会認定）

写真左から、大塚将悟さん、井本圭亮さん（茨城ブロック ブロック長）、木村萌美さん

そうごう薬局 水戸店
茨城県水戸市六反田町1136-1
TEL:029-303-6151 FAX:029-303-6152
（開 局 日 ）月～土（祝日を除く）
（開局時間）月～金 9:00～18:00
土（第1、3、5）9:00～13:00
土（第2、4）9:00～18:00
※毎月第2月曜日14:00から16:00に薬剤師による薬と健康の相談会実施

OTC薬やSOGO SMILE商品の取り扱いも充実

COMMENT

がん以外の領域でも地域に根差した薬局を目指します

そうごう薬局 水戸店 管理薬剤師 大塚 将悟

水戸店は隣接する水戸中央病院からの処方箋が大半を占めていますが、専門医療機関連携薬局については、がん診療拠点病院である茨城県立中央病院を連携先として認定を取得しました。私は2021年1月にこちらの薬局に赴任しましたが、前任の薬局長がJASPO（日本臨床腫瘍薬学会）の会員だったことと、がん関連の処方箋も応需していたことから、認定取得を目指すこととなりました。認定取得にあたっては、木村薬剤師が病院研修に参加しましたが、研修先の県立中央病院で処方箋を応需している患者さんのカンファレンスにも参加できたので、より踏み込んだ指導が可能となりました。認定取得の要件である勉強会の開催については、水戸中央病院の薬剤部の先生や地域の薬局とともにレジメンやトレーシングレポートの書き方などについての勉強会を開催しました。水戸中央病院とは、日頃から良好な関係を構築していますので、快くご協力をいただくことができました。今回はがんの領域で専門医療機関連携薬局の認定を取得しましたが、隣接する水戸中央病院からは、さまざまな疾患の処方箋を応需していますので、がん以外の領域においても地域に根差した、病院や患者さんから頼りにされる薬局を目指したいと考えています。

患者さんに寄り添いながら、薬局薬剤師としての存在感を高めていきたい

そうごう薬局 水戸店 木村 萌美

私は2022年にそうごう薬局に入社しました。在学中に研修で訪れた東京女子医大で薬剤師の方々の知識量や患者さんに対する貢献度に感動し、自分もこのようになりたいという想いから、国立がん研究センター中央病院に就職、がん専門薬剤師を目指してレジデントとして勤務していました。その後、配偶者の転勤に伴い福岡の病院に勤務しているときに外来がん治療認定薬剤師（APACC）を取得し、そうごう薬局入社後に外来がん治療専門薬剤師（BPACC）を取得しました。病院勤務時との大きな違いとして、薬剤師の声が医師にまで届きづらいという点はありますが、薬剤部と連携して協力していただくことで、徐々に意見を聞いていただけるようになってきています。今後は薬局薬剤師も症例を積み上げて論文としてまとめたり、学会で発表するなど、存在感を示していく必要があると感じています。がん患者さんについては、残された時間を闘いながらも、その人らしく過ごしてほしい、そのために薬剤師としてできることをサポートしたいという想いがありますので、治療中断や減量の原因となる可能性のある副作用については、支持療法の提案などを通して支えていきたいと考えています。今後はより患者さんの生活に寄り添って、チーム医療の一員として患者さんが日常生活を送りながら治療をするサポートをしてまいります。

（本インタビューは2023年11月に実施されました）

小児がん治療支援チャリティーライヴ「LIVE EMPOWER CHILDREN 2024」に協賛しました

日本では0歳から14歳の子どものうち、1年間に2,000～2,300人が小児がんと診断されています[1)]。
総合メディカルでは2024年3月末現在、全国で6薬局が専門医療機関連携薬局の認定を取得、外来がん治療認定薬剤師（APACC）5名、外来がん治療専門薬剤師（BPACC）8名が在籍し、がんの患者さんやそのご家族に対して専門的な知識や技能を生かしたトータルサポートを行っています。
今回は患者さんサポートの一環として、小児がん治療支援チャリティーライヴ「LIVE EMPOWER CHILDREN 2024 supported by 第一生命保険」に協賛企業として参加し、ブースも出展しました。

1）がん情報サービス「小児がんの患者数」
https://ganjoho.jp/public/life_stage/child/patients.html

LIVE EMPOWER CHILDREN とは
2020年からスタートした小児がん治療支援チャリティーライヴ。エイベックス社員の家族が小児がんを患ったことをきっかけに始まり、“エンタテインメントは、子どもたちの「生きる力」をつくる。”をテーマに、アーティストがエンタテインメントの力を通じて、小児がんの子どもたちとその家族を音楽で元気づけるためのチャリティーライヴです。

開催概要
日時：2024年2月15日（木）開場17:00～ / 開演18:00～
会場：東京国際フォーラム ホールA　主催：一般社団法人Empower Children
出演者：
石井竜也、大原櫻子、きゃりーぱみゅぱみゅ、倖田來未、ゴスペラーズ、SAM･ETSU･CHIHARU･DJ KOO from TRF、C;ON、Da-iCE、東京スカパラダイスオーケストラ、BUDDiiS、ピコ太郎、FANTASTICS、FRUITS ZIPPER、moumoon（50音順）
特別出演：つんく♂
MC：天野ひろゆき（キャイ～ン）
熊谷実帆（ニッポン放送アナウンサー）

●出展内容
・専門医療機関連携薬局の紹介
・タヨリスの紹介

専門医療機関連携薬局紹介ポスター

タヨリス紹介ポスター

COMMENT

今回のようなイベントへの参加は初めてでしたので貴重な経験ができました。私が勤務するそうごう薬局 伊勢原店は2024年2月に専門医療機関連携薬局の認定を取得いたしました。今後は薬局でも病院などと連携したイベントの企画や、他の薬局との勉強会の開催なども積極的に取り組んでまいります。
そうごう薬局 伊勢原店 専門薬剤師　荒井 元志（写真右端）

2023年 学会発表演題紹介

第17回 日本薬局学会学術総会

街の輪を医療でつなぐ ～レジリエント薬剤師として～

開催日：2023年10月8日（日）～9日（月・祝）　名古屋国際会議場（名古屋市）

当社より、薬剤師8名、薬局事務（RCS）5名（計13名）が発表しました。

「高血圧・糖尿病患者への経口補水液適正使用のための情報提供の取り組み」

そうごう薬局 八代竹原店　則武 琢磨（薬剤師）

脱水症対策として経口補水液の販売を行っていますが、購入を希望する方のなかに塩分・糖分の摂取制限が必要な高血圧・糖尿病患者も見られました。そこで、患者対象にアンケートを実施したところ、「日常の生活でも飲用する」など認識の誤りが明らかになりました。

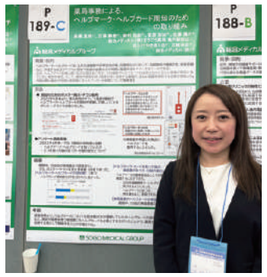
発表者のコメント

聴講者より多くの質問を頂きました。「販売時に上手く説明できていない、どう伝えればよいか」と質問された方には、適切な服用タイミングを一言説明するだけで間違った服用を防ぐ一助になるとご説明しました。今後は、その他の商品についても改めて学びを深め、適正使用について説明できるようにしたいと思います。

「薬局事務によるヘルプマーク・ヘルプカード周知のための取り組み」

そうごう薬局 亀戸駅前店　高橋 真希（薬局事務）

近年、ヘルプマークを身に着ける方が増える一方、その意味やヘルプカードの正しい活用方法などが周知されていない現状があります。そこで、病気や障がいを持つ患者が多く利用する薬局で、ポスターやチラシで周知する活動について報告しました。



発表者のコメント

聴講者で、新卒の薬局事務の方々に「事務のお仕事以外にも私たちで発信できる取り組みがあるんですね！」とコメントを頂いたり、ヘルプマークをつけている方には「知ってもらうきっかけを薬局が作ってくれていることが嬉しい」とエールを頂きました。お役に立てている実感を得ることが出来て嬉しかったです。

第33回 日本医療薬学会年会

医療薬学のこの先12年へのメッセージ

開催日：2023年11月3日（金・祝）～5日（日）　仙台国際センター（仙台市）

当社より、薬剤師2名が発表しました。

「薬局薬剤師がアドヒアランス不良患者の乳がん支持療法に適切に介入できた一事例」

広栄薬局 基町店　正木 研（薬剤師）

外来がん化学療法を施行している患者に対して、薬学的専門性を持ってフォローアップ対応マニュアルに基づき、最適なタイミングでフォローアップを行うことで、支持療法薬のアドヒアランス不良に適切に介入することにより、治療完遂に貢献できた一事例を発表しました。

発表者のコメント

本学会は病院薬剤師の発表が多く、シンポジウム等に参加するだけでも、とても勉強になりましたし、刺激を受けました。病院薬剤師の薬薬連携の悩みを聞く機会もあり、今後の自分達の連携に生かしていきたいと思いました。
また、研究発表を通じて薬剤師からもエビデンスを発信していく重要性を感じました。日々の業務においてもその視点を持っておかないといけないと改めて気づかされました。

総合メディカルの人財育成

総合メディカルでは、マネージャーを目指すための研修や、薬剤師としての専門性向上を目指すための研修などを多数実施しています。本コーナーでは人財育成部 白濱シニアマネージャーより、研修でお伝えしている内容の一部を連載でご紹介してまいります。

マネージャーに必要なキーワード
「人財育成とコミュニケーション」

「人財育成」とは

薬局長やブロック長といったマネージャーの役割は「人や組織を動かし、組織にしかできない大きな成果をもたらすこと」です。
スタッフの能力向上のための育成（人財育成）は、薬局の提供するサービスに新たな付加価値を生みだし、患者さんや地域への貢献、売り上げ向上に繋がるといえます。

薬局長を目指す方のための研修（マネジメント研修ファースト）について

■ **研修概要**
本研修では、薬局長として理想の薬局をつくるために必要となるマインド・知識・スキルを約3か月にわたって学びます。
eラーニングや講義のほか、グループ討議を通じて受講者同士で学びあう場を提供しています。

■ **研修内容　「部下の成長を促すCAHF※」について** ※CAHF：Check/Advise/Help/Follow
部下育成のポイントは「仕事を任せる」ことです。マネージャーは部下を信じて仕事を任せるとともに、部下に関心を寄せて、その仕事ぶりを観察し、ときに助言・支援を行い、自ら考えて答えを見出せるようにフォローします。
このような指導サイクルを「CAHFサイクル（観察/助言/支援/追跡）」といいます。サイクルを良好に回すために、質問や傾聴のスキル獲得のほか、日頃の信頼関係構築に努めることも大切です。
マネジメント研修ファーストでは、事例検討や現場実践課題を通じ、育成・支援力の強化を図っています。

専門性向上に必要なキーワード
「薬物治療評価」

「薬物治療評価」とは

薬剤師は、患者個々に薬物治療に関わる問題を把握することで、解決に導いたり、支援することが求められます。
そのためには、収集した患者情報と、医学的・薬学的情報を照らし合わせ、論理的に評価し、根拠に基づいた患者ケア、処方提案を行うスキルが必要です。
総合メディカルグループでは、このような問題把握・解決のために必要な考え方を“薬物治療評価”としてまとめ、標準化しています。

薬物治療評価の実践トレーニングについて

■ **研修概要**
講義やeラーニングで薬物治療評価の基礎知識を習得した後、各種ワークで実践に繋げます。
患者応対研修では、模擬患者に応対した自身の動画を通じて、薬物治療評価が実践できていたか自身の応対を振り返り、理解を深めます。このほか、自身の症例報告やトレーシングレポートに基づき薬物治療評価を振り返る研修も行っています。

■ **研修内容　「薬物治療評価　3つの視点」について**
薬物治療を抜けもれや偏りなく評価し、論理的思考をもって問題把握・解決を行うために、『適応評価・安全性評価・有効性評価』の3つの視点で評価を行います。具体的には、患者の病態に適した薬剤選択となっているか？副作用など、安全性を妨げる事象は起こっていないか？管理目標は達成されており、有効性が担保されている状況か？といった、多面的な視点からケアを行える薬剤師の育成に注力しています。

vol.87
2024年3月発行　発行／総合メディカル株式会社
〒810-0041　福岡県福岡市中央区大名 2-9-23
薬局事業本部　TEL：092-713-7061

みんなの健康ステーション
そうごう薬局グループ